

文 春 文 庫

東大生はバカになったか

知的亡國論 + 現代教養論

立 花 隆

21世紀の大学教育

文部省は知的亡國の元凶

教育制度の再検討を

暗記中心教育から脱した入学試験改革を

資料はすべて持ち込み可、英語の辞書も持ち込み可にする。そうすれば英語の単語をただひたすら覚えるためだけにものすごい時間を費やすとか、公式集を暗記するとか、いろんな必要がなくなるわけです。今の時代はいろんな知識の分野において、暗記は必要なくて、既にどこかにあるものをばっさと参照して、それをいかに利用するかという、そちらの能力の方がはるかに重要になっているわけです。それを全面的に大学入試に取り入れる必要があると思います。だから、今はそうやって資料持ち込み可でもいいし、さらに何年かたてば、今度はパソコン一台をだれでもが持って、インターネットに勝手に接続して、自分で好きなものを取り出して、答案を作るのに資するデータを集めてよいということにしたいと思います。つまり、社会が要求する能力というものが既に変わってきているわけですから、その変化を踏まえた試験にしていってほしいと思います。

学力低下の起源と東大の惨状

文部省の行った誤れる政策(中等教育における教育内容の切り下げ)

によって、高等学校卒業者の教育水準と、大学側がもともと求めていた入学者の学力水準とが合わなくなるといふ、高等学校と大学の間の教育内容の「接続不良」問題に端を発している。

文部省は知的亡国の元凶

「日本の理科教育が危ない」

文部省はいま、戦前の日本を亡国の淵に追い込んだ元凶である軍部とほとんど同じ役割を教育の面において果たしていると思っっている。日本を救おうと思つたら、一刻も早く文部省を解体すべきである。軍部と同じ役割とは何かというと、専制的画一的教育の司令部という意味である。日本人の多くはこの文部省完全管理型教育システムに慣れきつてしまつているために、これがどれほど特異な教育システムであるかに気がついていない。はつきりいって、このような教育システムは、後進国型(先進国をキャッチアップするために国家主導で教育システムを作る以外に方法がない)、あるいは専制主義国家型

教養学部は壊滅状態

これは日本におけるリベラル・アーツ教育の壊滅ということを意味します。また、東大教養学部が一人孤堡を守るといふ形で、リベラル・アーツ教育の旗を押し立てているので、壊滅というには早いかもしれませんが、ほとんどの大学で教養学部が消え去つてしまつた以上、戦後の新制大学が発足したときに大学人が共通して持っていた高等教育の理念である、大学とはまずリベラル・アーツをさすけるどころかという考えは明らかに失われてしまつたといつてよいでしょう。

それによつて、日本の高等教育は本質的に変質したのです。

リベラル・アーツとは何かというと、いわゆる一般教養です。日本では専門教育のほうが格が上の本當の学問で、一般教養などというものは格下の学問以前のものと考えられがちですが、大学の歴史においては、リベラル・アーツこそが大学の本流で、専門教育は一種の職業教育にすぎないと考えられています。

アメリカなどでは、大学の学部四年間は、リベラル・アーツしかやりません。いまでもそうです。つまり日本のかつての教養学部が四年間あるようなものなのです。専門教育は、大学を卒業したものが、それぞれの専門学校に入って行われます。いわゆる、グラデュエイト・スクールです。グラデュエイト・スクールは、日本ではしばしば大学院と訳されますが、本来、大学卒業後に入る職業専門学校なのです。ですから、ロー・スクール(法学校)、メディカル・スクール(医学校)などというように、スクールの字がかぶされているわけです。

リベラル・アーツを身につけることで完全な人格

大学の歴史は、十三世紀までさかのぼるのですが、基本的にそれはリベラル・アーツを教えるところでした。リベラル・アーツというのは自由学芸ともいわれ、三学四科からなっていました。すなわち、文法、修辭学、論理学の三学と、算術、幾何、天文学、音楽の四科でした。中世が理想としたのは古典古代の時代で、その時代の文化は、三学四科を身につけた自由人によって維持されていたと考えられたので、教養人たるもの三学四科を学習しなければならないとされたのです。

必要とされるのはゼネラリスト

リベラル・アーツの中身は、中世時代は先に述べた三学四科でしたが、時代を経るに従い、その中身も時代の流れに合わせて変容をとげていきます。そのころ、アメリカでは、最も現代的なりベラル・アーツのあり方として、人文科学、自然科学、社会科学の三分野をそれぞれ偏ることなく広く学習するという方式がとられていました。それがそのまま日本の新制大学に導入されたわけです。

スペシャリストの時代

一時、いまやスペシャリストの時代などといわれて、ネコもシャクシもスペシャリストにあこがれ、ゼネラリストなどというものは、つぶしがきいて何にでも使えるが、どの分野でも大して使いものにならない大衆的労働者のことだというような見方が流行していましたが、それは低レベルのゼネラリストのことです。スペシャリストの上に立つハイレベルのゼネラリストもいて、社会のあらゆるシステムは、結局、ゼネラリストが動かしているのです。

ハイレベルのゼネラリストは、当然技術も守備範囲

あらゆる大きな組織のマネジメントにあたる人、ポリシューメーカーをする人、デザインメーカーをする人、執行部門の上層部のエグゼクティブたち、みんなゼネラリストです。技術部門出身の大企業の社長とか、官庁のトップになる技術官僚などもいますが、それはみなスペシャリストとしてトップに座るわけではありません。たまたま自身が技術部門というだけで、みなゼネラリストです。技術屋だけど、経営の数字もわかれば、営業展開の戦略もわかる、政治や社会の動向もわかる、そういう人でないと組織のトップには座れません。逆に事務部門出身でも、技術がわからないものは、企業でも官庁でも、トップレベルに行くことはできません。技術はわかりませんですむのは、それこそ低レベルのゼネラリストで、ハイレベルのゼネラリストは、当然技術も守備範囲に含むゼネラリストでなければならぬわけです。

そういうハイレベルのゼネラリストを育てるのに一番いいのは、ハイレベルのリベラル・アーツ教育です。

日本は国是として科学技術創造立国をめざすといい、科学技術振興のための予算をこれから十七兆円つけるなどといっていますが、いくら予算をつけたって、サイエンスの国民的知識水準がこれほど下がっては、科学技術創造立国など逆立ちしたって不可能です。

無資源国の日本がここまで経済を発展させることができた背景には、これまで基礎科学はともかく産業利用面での科学技術振興が相当うまくいっていたことがあると思うんですが、それをうまくいかせた大きな原因の一つとして、高等学校における理科教育が相当の厚みをもって行われてきたということがあげられます。

日本のリベラル・アーツ教育は、実は相当部分が実質的に高校教育によって担われていた。大学入試の幅の広さ、水準の高さに引きずられて、高校教育がその水準をあげざるをえなかったのだ、しばしばいい高校では外国のカレッジなみの教育が行われていた。それによって育てられた質の高い中級技術者の層の厚さが日本の技術立国を支えていた。文科系の人間にしても、高校時代に強制的に理科を三科目履修させられたために、それなりに科学の基礎知識は持つようになっていた。それが、技術立国を事務や営業の面から支えていた。

こういう日本経済の基盤を支えてきた教育面でのいい条件がどんどん失われています。これまでに述べてきたような、高校教育の水準低下、大学入試の水準切り下げ、大学でのリベラル・アーツ教育の崩壊の三者があいまって、日本の知力の総和は大幅に低下しています。なかんずく科学技術に関するいちじるしい知識水準の低下が総社会的に進行しています。

新しいリベラル・アーツの構築

リベラル・アーツ教育はもともと人間教育が目的なのです。リベラル・アーツ教育を通じて、全人格的陶冶をはかることが目的です。バランスがとれたゼネラルな知識を与えることで、ものごとをトータルに総合的に見ることができる人間を育てようということです。現代の知の世界は、とめない細分化によって、その全体性が失われようとしています。細分化による知の解体現象に抗して、知の全体性を回復し、それを維持していくためにも、リベラル・アーツ教育は大切なのです。科目数削減は、それに逆行する行為です。

高等教育の現場では知の細分化がどんどん進んでいます。社会のあらゆる現場は、ゼネラルなのです。ゼネラルな知が求められるのです。

たとえば環境問題を解決しようと思ったら、工学、医学、生理学、化学、気象学、法学、経済学、社会教育学などなど、あらゆる関連学問を動員する必要があります。社会のあらゆる部門の現場で同じような要求があります。そのような要求に対し、それなら、必要な専門家をどんどん集めてくればよいかというところはいきません。どういう問題でも、その問題の全体像をとらえ、いま何が必要で、それは誰がどう役割分担すればいいかを考えるマネジメントが的確にできるゼネラリストが必要なんです。問題解決に参加する専門家も専門領域をこえた目が持てるゼネラルなスペシャリストが必要なんです。

見直されるべき学制改革

では専門課程は不要かというところ、そうではありません。高等教育機関は単なる高等職業訓練機関ではありません。高等教育機関のもう一つの貴重な役割は、高等教育機関そのものを維持し発展させていくことにあります。大学は上質な知的労働者のプロフェッショナル・スクールであると同時に、大学教育を再生産してゆく、アカデミック・スクールでもあります。大学は高等教育機関であると同時に、高等研究機関でもあります。一般大学教員は、教育職であると同時に研究職でもあります。その両様の意味での大学教育したを再生産し、雇用の場を提供するという役割も大学にはあります。

なぜなら、研究職にとって一番大切な資質は、**創造性(クリエイティビティ)**ですが、創造性がどこから生まれてくるのかといえば、異分野との接触によって生まれるシナジー効果(相乗効果)によることが多いのです。**この道一筋で、臆目もたらずに、ただそれだけを研究してきたという研究者がいい研究をするわけはありません。最近ではむしろ、インターディシプリナリー(学際的)な他の領域との接触部分にこそいい研究のシーズ(seeds)があるということがわかってきて、あらゆるところで、領域をこえた研究交流が進められています。個人の頭の中もそうです。できるだけ幅の広い領域の知識を沢山詰め込み、いわば頭のなかで知的化学反応を起こさせることによって、ユニークなアイデア、クリエイティブな考えが生まれてくるのです。良質のリベラル・アーツ教育をすくれた若者たちにほどこすことは、社会の知力の総和を増大させるだけでなく、クリエイティビティを増大させるという大きな副次的効果があるのです。**

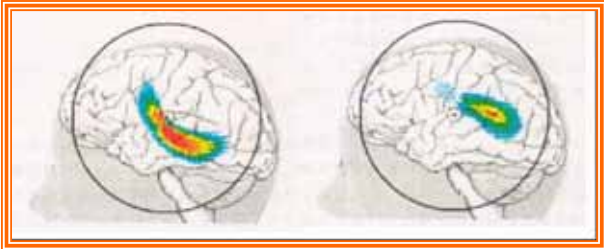
つまりいまの日本で進められている学制改革は、知力の総和を減少させるだけでなく、クリエイティビティを低下させるという意味においても、日本の将来を絶望的なものにしてつあるということです。
こういう学制改革をどういうバカが推し進めてきたのか知りませんが、そういうバカの手によって、いまの日本の大学は教養がない専門バカの大量生産機構になりつつあります。このままでは日本という国が知的亡国の道をたどるのはそう遠い将来のことではないでしょう。

技術屋だけど、経営の数字もわか

れば、営業展開の戦略もわかる、政治や社会の動向もわかる、そういう人でないと組織のトップには座れません。

逆に事務部門出身でも、技術がわからないものは、企業でも、官庁でも、トップレベルに行くことはできません。技術はわかりませんが、それこそ低レベルのゼネラリストで、ハイレベルのゼネラリストは、当然技術も守備範囲に含むゼネラリストでなければならぬわけです。

システムデザイン学科 技術系志向リベラルアート



- 親和性の高い造形(デザイン)
- 知的機能(ロボット)
- 人・環境に優しい機能(シミュレーション)
- 市場調査・工程管理(マネージメント)

技術屋だけど、経営の数字もわか

れば、営業展開の戦略もわかる、政治や社会の動向もわかる、そういう人でないと組織のトップには座れません。